



## バンコク日本人学校の特別支援教育 ～ 一人一人を大切にした支援教育を目指して～

統括特別支援教育コーディネーター 高橋 美樹子

「特別支援教育」という言葉は、随分耳慣れてきたのではないのでしょうか。文部科学省は「特別支援教育の推進」を掲げており、その充実には本校でも重要と捉え、「特別支援の視点をもった、個に応じた指導の充実」を教育活動の特色としてあげています。多様な文化や様々な価値観が混在する現代に、小学部・中学部を併せ持つ小中一貫校のバンコク日本人学校の「一人一人を大切にする特別支援教育」について、捉え方や支援体制、実践をご紹介します。

### 1 バンコク日本人学校の特別支援教育の捉え方

バンコク日本人学校においては、特別な支援を要する児童生徒とは、「障がいの有無に関わらず、学校生活を送る上で、個別の配慮や支援を必要とする児童生徒のことを含めて考える」とし、在学する全ての児童生徒に対して必要な支援や配慮を行うことを基本としています。例を挙げると、学力の課題、学校への不安、海外にルーツをもち日本語に不安を抱える児童生徒、学校や家庭の問題など様々なことが要因で困難を抱えている場合がその対象となります。これらの視点で考えると、対象となる児童生徒は多くなり、より身近なものとなってきています。

### 2 本校における特別支援教育の6つの取組

通常の学級内における支援	学級担任や教科担任が中心となり、個別の支援や学級全体に対する支援を実施。必要に応じて、学年教員や子供支援コーディネーター、特別支援教育コーディネーター等と情報共有をしながら、学習面や生活面の支援を行います。
--------------	---

<p>特別支援学級 (なかよし学級)</p>	<p>特別な支援が必要な児童生徒のための学級です。なかよし学級に在籍している児童生徒も通常学級の仲間です。本校では、インクルーシブ教育システムの理念に基づき取り組んでいます。</p>
<p>通級による指導① えがお教室 ◇小学部2学級設置 ◇中学部1学級設置</p>	<p>特別な支援が必要な児童生徒に対して、週1時間程度のソーシャルスキルトレーニングや児童生徒の困り感に応じた指導をえがお教室で行っています。</p>
<p>通級による指導② 日本語教室(1・2年生) 日本語指導(3～9年生)</p>	<p>国際結婚家庭やインター校からの編入生など、日本語で学ぶことに困難を抱えている児童生徒に対して週2時間程度、少人数での指導を日本語教室で行っています。</p>
<p>スクールカウンセラー との連携</p>	<p>臨床心理士・公認心理師のスクールカウンセラーが1名います。児童生徒や保護者のカウンセリングを行っています。友人関係、不登校、発達面の悩み、親子関係など様々な面で相談・助言や心のケアを行っています。また、必要に応じて、発達検査を実施しています。</p>
<p>ふれあいルーム ◇小学部・中学部設置</p>	<p>不登校や行き渋り傾向、在籍学級において不安などがあり、学習や活動が難しい児童生徒に対して、教室での学習活動参加に向けてサポートを行っています。</p>

上に示した6つの取組によって、本校の特別支援教育が実践されております。より一層の特別支援教育の充実に向けて、令和6年度から中学部なかよし学級を新設し、また日本語の通級指導(3年生～9年生)ができるようになりました。しかしながら、本校は在外教育施設ということで、限られた人的資源で教育活動を行っている現状もあります。なかよし学級入級や通級による指導を希望されても、全ての児童生徒を受け入れることができない場合もあります。受け入れの拡大を目指し、小学部は5学級まで増設することができましたが、日本にはある支援員によるサポート体制がないなど、日本と同等の支援体制及び環境設備に至らない点もあります。これらのことをご理解いただけますと幸いです。

### 3 最後に ～特別支援教育の充実に向けて～

子供でも大人でも、誰でも、得意なことや苦手なこと、好きなものや嫌いなものがあります。学校生活や社会生活を送る上で、「苦手」という部分だけが目立ち過ぎてしまう場合が

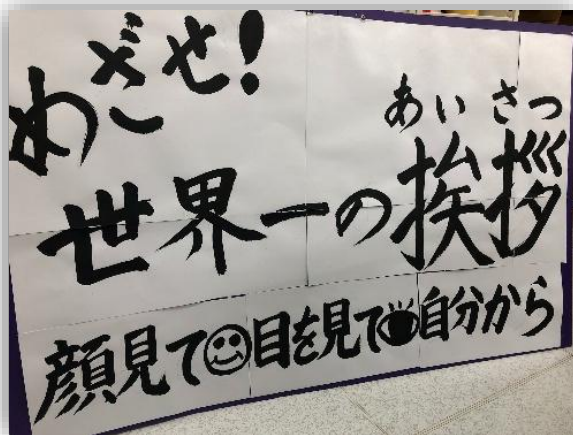
あります。誰にでも備わっている、「良いところ」に目を向けていきませんか。自分や友達  
が抱えている苦手な部分は「助け合う」「助けてと言って良いんだ」、そのような意識や行  
動力を、まず、学校全体でより一層育んでいきたいと考えております。一人一人を大切に  
した特別支援教育の充実に向けて、今後ともご理解とご協力をお願いいたします。

## ～世界一のあいさつが広がる学校を目指して～

小学部生徒指導主任 中村 一曜賜

本年度、バンコク日本人学校では「世界一の挨拶が広がる学校」を年間の生活目標に掲げ  
ています。その目標を実現するためには子供たち自身が、挨拶の必要性やその良さに気付く  
ことが大切です。そのために、年度当初に挨拶をする際の三つのポイント（顔を見ること、  
目を見ること、自分から言うこと）を伝えることから始めました。気持ちの良い挨拶をして  
いる児童生徒の紹介や、挨拶の良さを子供の口から語ってもらうなどといった取組を行って  
きました。そして現在、朝のレインボーゲートではたくさんの子供たちが自主的に挨拶運動  
に協力してくれています。「世界一の挨拶」の実現が、一步步確実に広がってきているこ  
とを感じます。

先日行われた始業式では、3学期の抱負の発表がありました。その中で、6年生の嶽釜舞  
帆さんは「卒業に向けて今まで以上に挨拶に取り組みたい。」という思いを力強く語ってく  
れました。その内容を掲載しますので、ぜひご一読ください。そして、ご家庭でも挨拶のも  
つ力についてお子様とお話をしてください。学校だけでなく、様々な場所で気持ちの良いあ  
いさつができる、そんな力を家庭と学校の両輪で育てていければと思っております。どうぞよろ  
しく願います。



# 「3学期の抱負」

6年 嶽釜舞帆

皆さん突然ですが、挨拶は大事だと思いますか。ほとんどの人は、「はい。大事です。」と答えるでしょう。しかし、本当に大事だと思っているのでしょうか。以前の私もそうでした。ただし、今の私は違います。なぜなら、挨拶が持つ力を理解することができたからです。

挨拶とは、相手や自分をいい気持ちにしてくれるだけではなく、その場の雰囲気までも良くしてくれます。また、挨拶をした時の声の大きさや、トーン、表情から、相手の状態や気分を感じ取ることができ、寄り添うことができます。私は、挨拶で誰かを救うことができると思います。

挨拶は、「おはよう」「こんにちは」だけではありません。出かける時の「行ってきます」もご飯を食べる時の「いただきます」も挨拶の一つです。「行ってきます」は家族に生きて帰ってくるという誓いであり、「いただきます」は農家さんや動物の命への感謝です。どの挨拶でも意味を理解し、思いを込めて言うことが大切です。

私の三学期の抱負は、理解するだけでなく、実行に移すことです。挨拶を理解すると、思いも自然と変わってきます。だからこそ、次に進みたいのです。具体的な行動は、お辞儀をする、笑顔で言うことです。先生、上級生、下級生でも関係ありません。誰に対しても、思いが伝わる挨拶を自らしていきます。

第一歩は、朝、教室に入るときに先生やクラスメイトに挨拶をすることから始めたいです。そこから、廊下で会う人、日頃お世話になっているモニターさん、ドライバーさんなど様々な場で挨拶をしていきたいです。元気で誰かを助けられるような挨拶で学校を盛り上げたいです。

卒業に向け、挨拶に力を入れ、世界一の挨拶に向けて、これまで以上に学校が挨拶で溢れるようにがんばります。

皆さんも、もう一度自分の挨拶を振り返り、みんなが心地よく学校生活を送れる挨拶をしていきましょう。

